

【論 説】

アリストテレスから学ぶ 貨幣とマクロ経済学

山 崎 弘 之

目 次

1. はじめに
2. 演繹論：プラトンからアリストテレスへ
3. 比例論：アリストテレスから現代へ
4. 社会は常に非通約性と通約性が共存する
5. 貨幣とはノミスマ（νόμισμα）である
6. メンガーに見られるアリストテレスの思想
7. アリストテレスから見える現代マクロ経済学への警鐘

1. はじめに

まず、アリストテレス（Aristotelēs 前 384-322）は社会的にどのような立場にあったのであろうか。当時のギリシャは奴隷制度があり、アリストテレスはその制度を正当化していた¹⁾。そのような中で彼は一般市民との間に乖離はなかったのであろうか。どのような立派な政策を言っても、それが階級社会の中で一般市民に理解されたのであろうか等々、幾つもの疑問で誰もが訝るであろう。これらのことはハッキリしたことは分からない。しかし、どうやらアリストテレスは自由人（自由市民）として自他共に認められていたようである²⁾。自由人（今で言う学者）の実践は労働者（職人や奴隷）を参照的な立場で観察し理論を編み出すことが仕事であったらしい。

また、政治学者ならいざ知らず経済学者なら誰もが訝るであろう。古代の哲学者である（かつ余り知られていないが生物学者でもあった）アリストテレスが経済を論じていても、どれほど今の経済にそして経済学に役立つので

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

あろうか、と。しかし、それほどまでに誰もが経済学は発達してきたと信じている節が今の経済学者にはある。経済学は古典派、新古典派そして近代経済学、マクロ経済学、ミクロ経済学等の分化した語彙から進化や発展のニュアンスがあるからである。おそらく経済学は経済の発展段階説に引きずられてのことであろう。アリストテレスが今生きていたら、それは間違いである、錯覚に陥っていると述べたに違いないと思われる。そのような話を始めなければならない。

こと社会科学や人文科学に関して、果たしてどれほどの進歩がなされたであろうか。その焦点を道徳や倫理に目を向ければ即頷ける。犯罪とはいかないまでも道徳にもとる経済行為が毎日のように新聞を賑わしている。いみじくもアダム・スミスやマーシャルははっきりと経済学と倫理学とを隣り合わせの学と位置付けていた。そうだとするならば、果たして経済学はどれほどの進歩を遂げたのであろうか。

では、アリストテレスがどのように経済学と倫理学を隣り合わせて考えていたのであろうか。それは一言で言えば、社会の意識向上に求めていた。それは学者の責務でもあった。それを哲学で言えば、アナログアに根を持つ全体論、演繹論そしてそのヴァリアントのトポス（弁証術）である。結論を先取りすることになるが、彼の議論は後世の学者達に多大な影響を及ぼしてきた。彼の影響は哲学のみならず諸科学に及ぶ。近世に輝く哲学の巨匠・ヒュームとカントも、経済学の分野で言えば、オーストリア学派のメンガー、ハイエクそしてケンブリッジ学派が生んだケインズ等々にも。

アリストテレス思想の口火を切るに、経験論のヒュームの一文を引用することから始めよう。

「一艘のボートのオールを漕ぐ二人の人は、たがいに約束を交わしたわけではないが、一致ないし合意によってそうする。財の保有の固定に関する規則は、徐々に生じ、ゆっくりとした進行を通じて、その規則に背くことの不都合が繰り返し経験されることによって、〔強制力が〕強くなるが、だからといって人間の合意から引き出されないことにはならない。反対に、この経験が、利益の感覚が

仲間全員に共通のものになったという確信をいっそう強め、彼らの振る舞いが今後も規則的であるという信頼を与える。そして、われわれが節度を持ち、自制することは、この期待だけに基づく。同じようにして、諸言語が、約束によらずとも人間の合意によって徐々に確立される。同じようにして、金銀が交換の共通の尺度となり、その百倍の価値のあるものに対する十分な代価と見なされる³⁾。」

こう言った社会全体で暗黙裏に合意が形成され、社会の秩序や調和が成立している。これは成文化されているわけでもなく、人間社会における「意図せざる結果」である。つまり人間意志が働いているわけではない。合意に従わないと不合理であることに気づかされるからである。実はこの合意が行き渡っているから人間社会が存在する。人間社会はこの表面に表れない合意でどれほど生かされているのであろうか。それは多様にして多岐に渡る。

ヒュームはこうも述べている。したがって「正義は人間の合意（agreement⁴⁾、convention は黙約）から起こる⁵⁾。」「正義がなければ社会は直ちに崩壊し、すべての人が、社会の中で想定し得る最悪の状況よりも限りなく劣悪な、野蛮で孤立した状態に陥るに違いない…⁶⁾。」そしてこの自然な合意の姿は経験から学ぶことができる、と同時に精神の構造にその根拠を見出すことができる。「自然は、感情（愛情 affection）の不規則で不都合な点を改める対策を、判断と知性において与える⁷⁾。」その自然とは「人間の行為の結果であるが人間設計の結果ではない⁸⁾。」ことを生み出している。もとより、神人同形論（anthropomorphism）で言っているのではない。社会的にあらしめられた（洗練された）人間の存在を自然の中に求めねばならないのである。この自然な人間は社会に秩序や調和を促すべく、意志によらず全体論ないしは演繹論で展開し、その中に生きているのである。その最も良い例が言語の世界である、と。

結論を先取りすれば、経済の核をなす貨幣は言語と同様に、秩序や調和を後援するべく社会的につくられたものである。しかしながら、現代の人間は社会におけるこの見えない約束（合意や黙約）を忘却して、意志や理性にどっぷりつかっている。そしてそれがいている。それに気づかないのが現代人で

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

ある、と警鐘を鳴らしてきたのはハイエク、ポパー、マイケル・ポランニーである。意志や理性によってつくるものとそれらによらずつくられているものとの区別である。区別がつけられるなら自覚があるというものである。高度の技術文明に囲まれた世界に生きてると、全てが理性や意志で解決が可能という意識になってしまう。換言すれば、社会的にあらしめられてある個人と主体的個人とがどのような姿勢で融合して機能しているのかの吟味が希薄になる。これは利害におもねるポピュリズムを避けるために、つまり真の民主主義を展開するために欠かせない議論でもある。

古代哲学者のアリストテレスは既にこの区別を意識して、政治や経済の核の部分を議論していたのである。では、アリストテレスは社会的にあらしめられている個人と主体的個人とをどのように捉えていたのであろうか。個人は常に利己的であり、社会的ではない。その個人が社会的個人になるためにどのような姿勢が描かれるのであろうか。アリストテレスは「非通約性（もしくは非共約性）」と「通約性（もしくは共約性）」を共存の中で解決しようとした。それはまさに倫理を含意した経済（貨幣）で見出されていたのである。その利己的個人が抱える非通約性を比例論、全体論⁹⁾（類比＝アナロギア）、そのヴァリアントのトポス（論点や命題を含意する弁証論）で解決しようとしたのである。

2. 演繹論：プラトンからアリストテレスへ

まず、プラトンのアイデアの思想すなわちアナロギアの思想を見てみよう。プラトンは『国家』でかの有名な「洞窟の比喩」を登場させている。そのアイデアの世界はアナロギアの数学的比として次のように示される。

太陽：現存する全ての生き物＝善のアイデア：他の諸々の認識対象

人間は何も見えない洞窟の中で生活をしている奴隷である、という比喩であ

る。われわれ人間に見えるものは精々たいまつで照らされる陰の世界である。しかし、その洞窟の出口の外の世界で見たものはぎらぎら輝く太陽であった。その太陽は偉大で人間はただ驚嘆するだけであった。太陽こそ人間という生物の根源であり、そして太陽に凡ての面で依存する世界が展開されていた。その太陽こそ善のアイデアに相当すると考えたのである。アイデアの世界は人間が入ることの出来ない世界ではあるが、太陽に照らされ生物が秩序と調和をもって生きているのではないかと。現にその生物がもつ生体たるや実に見事にできているのではないかと。

太陽によって全ての生き物が生かされているように、その太陽に等しい善のアイデアを措定するならば、善のアイデアを実現するべくわれわれの存在も整えられるはずである。しかし、所詮われわれ人間はアイデアに至ることはできない¹⁰⁾。アイデアの世界を人間社会に実現することは到底不可能である。しかし、生物の生体に見られる自然な能力に鑑みて人間は善（アイデア）の世界に入るべく働きかける能力が何らかの形で与えられているに違いない、と考えられる。どうやら西洋の哲学はこの問いを懐き続けて歩んできたようである。

まったく善の世界が太陽ならば、その太陽が造り上げた生物の仕組みに見ての通り、人間は確かな世界を見出せるに違いないとみることができる。まずは包括的な善のアイデアを思考してそれに近づくべく進もう。ここにアイデアの全体論が展開される。したがってアナロギアは比例（比＝ギリshos, ラ ratio）であり、類比、類推を含意してきたのである。それはまた学の方法論で言えば演繹である。アナロギアが数学と同値におかれるのは数学が公理（演繹）を含意しているからである。

どこか思弁の世界であると軽んじがちである。しかし、人間が有限者ならそれなりに無限者との対比でより善き世界を觀念し、進むことが出来ると考えたのである。これがアナロギアであり、演繹論の始まりである。この思考は既に古代から見られた。換言すれば、演繹は驚きとともにあり、科学もまた驚きとともに開始されたのである。近世の諸科学の興隆は科学者・ニュー

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

トン（Newton, I. 1642-1727）に帰せられるが、その理由は彼の万有引力の法則等によって解き明かされた神秘的宇宙に対する驚異にあったのである。それは数学という演繹が解いた驚きに魅せられたのである。アダム・スミスもその驚きの中にいた¹¹⁾。

あらためて諸科学（人文科学や社会科学）での数学の立場を確認しておこう。演繹の起源をピュタゴラスの数学の公理に求めるのか、それともプラトンが投げた比喩（アナロギア）に求められるのか、どちらが先かは分からない。言えることは、それらは共に伴走し得た間柄であった。したがって、アナロギアは比例、類比、類推とも訳されるのである。

比例による推量など思弁でしかないで一蹴されてもよい。この時点で確かに思弁的である。しかし地球に存在する生き物はその仕組みを解析する限りその素晴（精密）らしさ、神秘さを感じるなら、この全体論的動機はあらゆる科学の解明に役立つことは間違いないであろう。生物生体をもつ精密を援用して自然科学は物理的システムの創造へ、社会科学は秩序論や調和論へと進んできたことだけは間違いない。科学は経験（帰納法）に基づくが、その前提に演繹が存在していることを忘れてはなるまい。アリストテレスが哲学者にして生物学者であったことはプラトンのアナロギ（類比や比例）を継承しかつそれを経験に委ねざるを得なかった理由となろう。

それにはまず彼らの相違に触れておこう。アリストテレスは述べている。

「或る球は、これこれの球とは別に離れて存在し、あるいは或る家は、その煉瓦とは別に離れて存在するのであろうか？ それとも実は、もしそれらがそのように〔質料とは離れて〕存在していたとすれば、『これ』と指示されうるいかなる個体も生成しなかったはずだから、むしろあの或る球や家〔すなわち球や家の形相〕は『このような』と言われるものであって『これ』と指示され限定される個別的なものではなく、かえって我々は『これ』なる特定の質料から『このような』形のもを作りあるいは生むのであり、そして生まれたときに、それが『このようなこれ』と言われる特定の個物ではあるまいか。そしてこの全一的なこれ、たとえば…『ソクラテス』とかは、特定の『この青銅の球』に対応するものであり、そして〔一般に種または類としての〕『人間』とか『動物』とかは『青

銅の球一般』に対応するものである。だからして、或る人々〔アイデア論者たち〕が個々の事物とは離れて別に実在するものとして説くことを慣わしとしているエイドスのような意味で形相^{エイドス}を事物の原因とすることは、明らかに事物の生成にとっても存在にとっても全く無用である¹²⁾。」（一部修正訳筆者）

エイドスとはプラトンにおいてアイデアではあったが（つまりエイドスはアイデアを語源としている）、アリストテレスではエイドスは形相つまりここに存在する具体的形のことである。いまここにガラスのワイングラスがある。その場合、ガラスは質料（ヒューレで素材のこと）であり、ワイングラスの形が形相である。プラトンとアリストテレスの相違はどこにあるのであろうか。アリストテレスは言う。具体的形の物（球や家そしてワイングラス）の生成においても存在においても「善のアイデア」（エイドス）に包摂されて理解されてはならない、と。つまり具体的形が超越的存在に直接結びつけられて理解されてはならないのである。それ（球や家そしてワイングラス）は特定のつまり具体的であるがゆえに質料によってつくられた個物である、と。

だが、アリストテレスは続ける。具体的物（形相）は「全一的な」ものである。それはわれわれの感覚によって認識されるのである¹³⁾。その「全一的な」認識の原理とは何か。それは類比によって認識されるのである¹⁴⁾。「全一的」とは統一がとれたものと認識される。その認識は類比による。類比とは数学の公理であり、logos, ratio でもある。球や家そしてワイングラスは人間がつくり出したものである。それには目的を含みその目的は人間の志向を含意している。その認識は類比（比例）による、つまりある公理による、つまり演繹による、ということになる。アリストテレスはプラトンの超越的存在である善のアイデアとは切り離されて経験が表面に出ることをあげてプラトンを批判した。しかしその認識が類比である限り、結局はプラトンのアナロギアを含意することになる。

プラトンのアナロギアのアリストテレスへの継承を確認しておこう。アリストテレスはプラトンが創設したアカデメイア（世界初の大学・研究機関）で学んだ学徒であった。アリストテレスは経験を重んじたが故に、プラトン

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

の超越的アイデアを批判するが、類比つまり理性や目的論においてはプラトンを継承する。アリストテレスはしばしば「普遍的にそして類比的に語る¹⁵⁾」とか「類比関係においてそう言われる¹⁶⁾」と言う。アリストテレスの『形而上学』を紐解けば類比において語られる箇所の多くを見出すことができる。つまりアリストテレスは現実に流転するさまざまな現象に秩序や調和そして目的を類比として見ている。つまりその類比はプラトンが掲げてきたアナロギアに淵源する。

敢えてプラトンとアリストテレスの相違を言えば、前者が思弁的で不十分さが否めないのに対して、後者は現象に表れる具体的経験を提出して分析的に纏めたためところにある。現象を経験的に見るからには現象を現象たらしめている「始動因」をおかねばならない。アリストテレスは言う。「原理というものは、他のもののうちにあり、または他のものとしてのそのもの自らのうちにあるところの、その転化の原理〔始動因〕のことである¹⁷⁾。」訳者の出 隆は別の箇所の注で言う。「(大前提) およそ生成するものは或る原理すなわちその終わり (目的) にむかって生成する、すなわち終わりは原理である。(小前提) 然るに或るものの現実態はそのものの終わり (目的) である。(結論) それゆえに、現実態は或る原理である、したがって、現実態は、原理とし実体としては、可能態よりも先である¹⁸⁾。」この「可能態よりも先にある」とは何が先にあるのか。それはプラトンのアイデアであることは想像に難くない。アリストテレスは、それを自律の中に見ている。換言すれば、アリストテレスは生物学者らしく生体に類似してフィードバックの中に見ている。フィードバックはアナロギアのヴァリエントと見ることができよう¹⁹⁾。

最後にアナロギアと数学との関係に触れておこう。アナロギアは無限（アイデアの世界）と有限（現実の世界）とが対比で有限が無限に倣うべく思索を進める方法が数学や幾何学の比例に還元されて理解される。まさに類比や類推で理論を思考しそれに基づき実践の動機となった。数学がもつ純粹思惟性や幾何学が持つ調和や秩序が有限を無限に導く何らかの方法のインセンティ

ブになったと考えられる。数学や幾何学がそのままの姿で凡ての対象に適合しうると言うのではない。比例は数学や幾何学が持つ公理の世界を演繹論として携えることとなったのである。千葉 恵は言う、「ギリシャ数学は（共通尺度を見つけることの出来ない）この無理性に関する比例論の問題を通じて、実践的体験的知識から論理的省察が重要な機能を担う演繹的で体系的学問に進展していったのだと思われる²⁰⁾。」（かっこ内筆者）

この比例（アナログア）による思考はプラトンからアリストテレスのみならず現代へと引き継がれている。つまり比例（アナログア）は演繹論として西欧を支配した考え方であり、近世哲学へそして現代ではあらゆる科学の方法論の基礎となっている。これは西洋思想の根底に脈々と流れる思想の原点である。もとより、この演繹論はホーリズムと理解されてはならない。全体の調和や秩序が優先されるが、それは個人に基づく認識、倫理そして判断に依存する。これがオーストリア学派経済学では方法論的个人主義に溶けている。

少々跳んだ議論になるが、メンガーの需求は「生命や福祉の確保」という（ある意味では此岸にあらずして彼岸の）目的に向けた演繹論の基底を提供していると言えよう。それを受けて、ハイエクは経済（貨幣）、法そして言語は自生的秩序の演繹論として展開され得ると確信した。近世の巨匠、ヒュームそしてカントもこの中にいる。ポパーの反証論もパースのアブダクションも同様な立場で哲学構築の素材としてきた。

ケインズにしてもハイエクにしてもその学的方法という科学的環境を古代哲学から学んでいる。その基礎は演繹論である。もとより、このことにおいてプラトンもアリストテレスも同じ立場である。『ケインズとハイエク』を書いたステール（Steele, G. R.）は述べている。「ケインズは（プラトンやアリストテレスのように）統治に相応しい、その種の人間に関心をもっていた。市民の美德は公益に向けられた活動によって得られる。」²¹⁾ と。この考え方においてケインズもハイエクも同じ立場にある。

経済学を専攻する大半の人々は経験科学であるからには方法論的に実証性

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

が第一であると考えて何の迷いも持たないのである。それは演繹に対して帰納を重んじる人々である。彼らは科学は帰納にあらずして演繹であったことに気づかないのである。ひところ経済学と言えばマルクス経済学と決めてかかった時代を思い起こす。マルクス経済学が下火になったとしても、それはイデオロギーとして下火であるが故のこと。日本人経済学者から実証主義一辺倒の意識が変わったわけではない。今エコノミストと言われる人々はその実証性を唯一の科学性と考えていることは間違いない。科学の始まりは人間が生得的に持つ演繹であることに気づかないのである。科学は驚きをもって始まると言われるが、その驚きが同時にわれわれは科学の動機になっていることを忘れてるのである。今こそ経済学は演繹を取り戻す必要に迫られるのではないか。

メンガー、ハイエクそしてケインズもこの演繹法を帰納法のみならず科学の重要な方法と捉えていたのである。ハイエクは、それはなんと古代哲学に既に芽生えていたと言うのである。この演繹論に気づかず彼らの経済学を分かったかのごとく展開する人々が現代では大半である。古代哲学者のプラトンはその演繹論をアナログアとして最初に提示したのである。有限な人間が無限を思考する（これが科学に課せられた運命であるがゆえに）勇気を与えたのである。それは幾何学が持つ公理（アナログアにして演繹）の世界を背景としていたのである。

3. 比例論：アリストテレスから現代へ

アリストテレスは道徳や正義を比例を用いて説明を施している。比例（アナログア、*αναλογία*）をもって均衡、調和、秩序をもたらす糸口としたのである。比例は今で言う数学である。その起源はおそらくギリシャの宗教家、数学者、哲学者・ピュタゴラス（Pythagoras 前 582-497）からプラトン（Platōn 前 427-347）に流れた考え方であろう。しかし特定することは難しい。その起源を少々辿ってみよう。

数学はいまでは自然科学のみならず諸科学に用いられている。我々の文明社会に数学の貢献は深淵にして大きいものであることは誰もが認める。その貢献は科学的対象における数量化にある。対象を数的に把握し操作することができることとみて、数学は現代科学の大いなる手段と考えられている。

しかしながら、数学は幾何学からはじまったようである。西洋の学者が思念してきた数学は少々趣を異にする。とりわけ古代、中世そして近世において、学者の捉えた数学は神秘を意味し、ほぼ哲学と同義であった。数学者であるピュタゴラスが哲学 (philosophy) の意義を「知 (sophia) を愛す (philos)」と最初に言い出した人である。いわば西欧哲学 (学問) の始まりは彼であろう。その後のプラトン、アリストテレスは彼の継承者に入るのであろう。西欧における諸学は彼らの哲学に依存すると言って過言ではない。その影響は中世に及び、簿記を体系づけた、ルカ・パチョーリもそれを継承している²²⁾。

数学の嚆矢を幾何学に見よう。紀元前のピュタゴラスに始まる、幾何学²³⁾ は「ピュタゴラスの定理」で分かるように、公理論であり演繹を含蓄する。算術 (代数) が数の離散を伴う²⁴⁾ のに対して、幾何学は地理上の線分であり連続量である。連続する線分は“比”で表された。公理論は“比”によって展開されたのである。かくして、プラトンは“比”を援用してアナロギア (演繹論) を展開した。比に美を見た、黄金分割 ($2 : \sqrt{5} + 1$) はそのひとつの例である。哲学の一分野、美学の始まりである。パチョーリの「神聖な比例²⁵⁾」もその類いである。この演繹論は西欧哲学を彩る認識論、倫理学そして判断論の萌芽となった。幾何学が思惟の基礎に横たわることは実に興味深い。その影響は近世に至っても見られる。カントが認識論の概念形成に「図式 (Schema)²⁶⁾」を用いているのはその現れであろう。哲学者・スピノザ (Spinoza, B. de, 1632-1677) が自らの汎神論の証明 (演繹) に幾何学を用いたのも理解できる²⁷⁾。要するに、数学 (とりわけ幾何学) は演繹を司る方法であった。現代数学が帰納法的手段として理解されることを考えると真逆に置かれていたと言えよう。したがって、現代の経済学において

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

は忘却の彼方に追いやってしまった感否めない²⁸⁾。

この包括概念を思念する、すなわち演繹を専らとする哲学が公理論に基づいていた幾何学を援用することはまたとない機縁であったことは想像に難くない。したがって、アナログアに起源を持つ比例、類比、類推は同義であった。この思弁的立場を後援してきたのが数学・幾何学であった。古代ギリシャ哲学が比例を用いて論じることは真理を求める姿勢でありごく自然であったと理解される。こうした演繹論は形式論理学や三段論法がかかげる帰納対演繹の演繹ではないことに注意したい。

再度「洞窟の喩え」を哲学的に見てみよう。人間は洞窟に入れられた奴隷である。その人間はあるとき洞窟から出たらまぶしく輝く太陽に“驚嘆”をおぼえた。科学はこの驚きから始まったと述べたのはアダム・スミスである²⁹⁾。この驚きをプラトンから継承していることは想像に難くない。人間はその太陽の偉大な恩恵に与るから、太陽は絶対者である。われわれは到底太陽即善（イデアの世界）には到達することができない。ではどうすればよいか。善のイデアを説明すると同時にその実現には諸々の認識対象を整えていこうとする、努力が込められることになる。善の実現は彼岸で無理としても、此岸という社会に秩序や調和を恒久的に構築して姿勢を養っていこう。こうした演繹論を展開する意図が見て取れる。西洋の人文科学や社会科学は諸学派やジャンルの相違があるとしてもこの演繹論の流れの中にあることは間違いない。

アダム・スミスやハイエクにこのアナログが見られる。スミスは『哲学論文集』のなかで次のように述べている。

「哲学は、…すべてのばらばらな対象をいっしょにする見えない鎖を示すことによって、この不協和で支離滅裂な諸現象の混乱状態に、秩序を導入し、想像力の乱れをしずめ、そして、想像力が宇宙の大回転をながめる時には、それ自体で最も快適で想像力の本性にも最もふさわしい、平穏と落ち着きの調子をとり戻させようと努力する。それ故、哲学は、想像力に語りかける学芸のひとつとみなされよう³⁰⁾。」

また、ハイエクの抽象は古代哲学者・アリストテレスのアナログア（類比）を援用している。ハイエクは『科学による反革命』と『個人主義と経済秩序』の2回にわたって展開している。ハイエクはスミスより踏み込んだ議論を展開する。ハイエクは言う。

「社会科学に関連した人間活動の対象およびこの人間活動そのものにかんして重要とおもわれる点は、人間活動を解釈する場合、物理的性質を少しも共有しない非常に多くの物理的事実のいずれか一つを同一の対象または同一の行動の事実として、われわれが自ずから、無意識のうちに一緒に分類しているということである。われわれは自分と同じく他の人々もまた非常に多くの物理的に異なった事物、 a 、 b 、 c 、 d 、…等々のいずれか一つを同一のあつまりに属するものと見なしていることを知っている。そしてその理由は、同様にどんな物理的性質をも共有しないような運動、 α 、 β 、 γ 、 δ 、…のいずれか一つを通じて、これらの事物のどれか一つに対し、他の人びとが自分と同じように反応するからだということを知っている。しかもわれわれが行為する場合、常にこうした知識に依拠しており、この知識は、他の人たちとのどんな交わりにも必ず先行し、また予め想定されてもいる。したがってそれは、〔同一の〕集まりの構成要素としてためらいなく認知される。あらゆるさまざまな物理現象をことごとく数え上げる立場に立つという意味での意識された知識ではないのである³¹⁾。」

つまり、われわれの脳は常に包括概念の下で認識や判断をしている。しかし、それは多くの場合共通項を持たない様々な現象に満ちている。人間社会には非通約性と通約性が同居することを述べている。それでよいのである。むしろ、非通約性に通約性として展開するこの脳の姿勢は無意識の下にある。非通約性と通約性との乖離を解決する道は一つとしての包括概念の存在である。それはアナログアの思想であり、ハイエクに言わせればわれわれの精神に存在し、社会を包括する「抽象」の役割である。ハイエクの「抽象」は言葉の世界だけではなく、経済や貨幣の世界をも包括する。哲学的に言えば、論理学、倫理学、美学に加えて法哲学に及ぶ。それはひとえにアリストテレスの思想に淵源する。

4. 社会は常に非通約性と通約性が共存する

アリストテレスは『形而上学』の冒頭で次のように述べている。

「この学は、これを我々が獲得し所有したときには、なんら我々を、最初にこれを求め始めたときとは逆の状態に置きかえないではやまないものである。けだし、これを求め始めるのは、…誰もみな驚異することからである。すなわちそれは、物事の現にそうあるのを見てそのなにゆえにそうあるかに驚異の念をいだくにある。たとえば…太陽の夏至・冬至について、あるいは正方形の対角線が辺で測り得ないこと〔非通約性〕について（というのは、最小の単位をもってしても測り得ない〔割り切れない〕ようなものがあるなどということは、誰にとっても、いまだその原因を研究していない者にとっては、驚異すべきことと思えようから）。——しかるに、その終わりには、求め始めたときとは逆の状態に、しかも俚諺りげんの言うように、『より良い』状態に、置きかえられざるをえない。…すなわち、すでに幾何学的認識を獲得し所有している者にとっては、もしも対角線が辺で測りうる〔通約的である〕ということになりでもしたら、それこそかえって逆に最も驚異すべきことであろうから³²⁾。」（ルビ・りげんは筆者）

古代哲学から近世へそして現代へ、アトミズムは否定されて個物主義に変遷を遂げてきた。その契機は既にアリストテレスにあったように思えてならない。それを考えてもアリストテレスは古代にして最大級の哲学者であった。確かに個物主義においてはロックを批判したバークリがそしてヒュームやカントが確認したところである。その流れの中にあるのがハイエクである。それは抽象であった。抽象は非通約性と通約性との乖離を超える動力である³³⁾。

論をもどそう。対角線は無理数になり、数ではない（当時はそう考えていた）。だがその非通約性をもって図形（全体）は表現されているではないか。つまり、社会が非通約性（非共約性）に満ちたものであるとしても、その克服に幾何学の比例すなわち演繹論において通約性を見出せるとしたのであ

る。そして通約性を見出して構築に励もうとしたのである。この思想は物理学者のニュートン（Newton, A. 1642-1727）に始まり、近世の哲学者・ヒューム、カント、経済学者・スミス、その継承者・近代経済学者・メンガー、ミーゼス、ハイエクに継承されてきた。彼らの哲学そして諸科学はこの演繹を熟知したところで発生した。その中心にアリストテレス哲学が存在したと言って過言ではないであろう。アリストテレスは『形而上学』で次のように続ける。

「物事は多くの意味である〔または存在する〕と言われるが、そういわれるすべてのあるもの〔存在〕は、或る一つの原理^{アルケー}との関係において存在といわれるのである。すなわち、その或るものはそれ自らが実体^{ウーシア}なるがゆえにそう言われ、他の或るものは実体の限定〔属性〕なるがゆえに、また或るものは実体への道〔生成過程〕なるがゆえに、あるいは実体の消滅であり、あるいはその欠陥であり、あるいはその性質であり、あるいは実体を作るものまたは産むものであるがゆえに、あるいはこのように実体との関係において言われるものどものこれら〔生成・消滅・欠如・性質・等々〕であるがゆえに、あるいはさらにこれらのうちの或るもの・または実体そのもの・否定であるがゆえに、そう言われるのである。——だから我々はまた『あらぬもの〕〔存在の否定すなわち非存在〕をもあらぬものというのである³⁴⁾。」

アリストテレスは続ける。「『存在』というのにも多くの意味がある。〔訳しかえれば、物事はいろいろの意味で『ある』と言われる〕。しかしそれらは、或る一つのもの、或る一つの自然〔実在〕との関係において『ある』とか『存在する』とか言われるのであって、同語異義的ではなく、あたかも『健康的』と言われる多くの物事がすべて一つの『健康』との関係においてそう言われるようにである…³⁵⁾。」現代の健康診断を思い浮かべれば分かる。様々なデータ（血液検査、尿の検査、画像診断の結果等々）を突きつけられる。それらのデータは「健康（もしくは病気）」という包括概念に取り込まれ一つである。一つであるということは、健康（病気）という包括概念でつまり原理^{アルケー}で非通約性を通約性としていることである。その原理^{アルケー}にハイエ

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

クは「抽象」を据えた。

もう一つ重要なことが述べられている。それは「我々はまた『あらぬもの』〔存在の否定すなわち非存在〕をもあらぬものというのである」というくだりである。これはカントが無限判断³⁶⁾と名づけるところである。この無限判断は「閉じられた集合」にらず「開かれた集合」を含意する原理である。アリストテレスはある包括概念に収束する姿勢を論じている。それはプラトンの「洞窟の喩え」に基づくアナロギアを経験に付したことを意味する。「非存在」の存在として見据えたことにある。カント哲学者の石川文康に言わせれば、「無限判断に関するもとの考察は、少なくともはるかアリストテレスにまでさかのぼりうるが、結論から言えば、18世紀のほとんどすべての代表的講壇哲学者が無限判断を論じていた³⁷⁾。」と述べている。確かに、これはカントのアナロギア（Analogie）の説明に通じるものである³⁸⁾。

プラトンの「洞窟の喩え」はどこか神秘的なアナロギア（演繹論）であった。まさに思弁的な哲学の代表であった。これに対して、アリストテレスはこれを修正して経験に基づく包括概念の中で善を導くべくアナロギアを展開したと言えよう。その包括概念の一つに経済（貨幣）を挙げている。そこに非通約性を通約性として思念される道が開かれる。この乖離は生成過程（動態や変化）として解消されるのである。既述のように（スミスも述べている）、社会の「この不協和で支離滅裂な諸現象の混乱状態に、秩序を導入し」得るのである。したがって、ハイエクに言わせれば、様々な諸財の交換を扱う経済学こそ諸科学の中で非通約性と通約性との乖離を論じる頂点に立るのである³⁹⁾。

経済社会は実にバラバラである。商品という商品いろいろなものが存在する。それだけにそれに携わる労働は千差万別である。それは非通約性の具体的な企業集団としかいいようがない。しかし、そのバラバラな商品を見事に消費者に届けている。それを考えればこの非通約性を通約性へ変える道としてにわかには貨幣が浮かび上がる。これは経済学プロパーの問題である。

5. 貨幣とはノミスマ（νόμισμα）である

アリストテレスは貨幣の発生や役割について『ニコマコス倫理学』で述べている。倫理学で貨幣について述べるからにはそれ相当の理由が存在する。交換は均衡（正しい交換）、正義に基づかねばならない。

いま A 大工が造った C 家と B 靴屋が造った D 靴が交換されるとする。その均衡は比例で表される。当然家は高価なもので一生に一度か二度しか建てない（買わない）ものである。それに対して、靴は一年も履けば傷み買い換えを余儀なくされる。したがって、交換の比は $A : B = C : xD$ と表される。当然 xD の x は家が靴と比較して高価であるから、何倍かの数量を掛けねばならないことを意味している。この x を貨幣は見事にやってのける、と言うのである。「こうした目的のために貨幣は発生したのであって、それは或る意味においての仲介者（メソン＝中間者）となる。事実貨幣は、あらゆるものを、したがって過超や不足をも計量する。」と。「かくして貨幣はいわば尺度として、すべてを通約的とすることによって均等化する。」これだけなら、何の変哲も無い議論で理解が容易である。

アリストテレスはこれに次のような説明を加える。「あらゆるものが或る一つのものによって計量されることを要するのであり、この一つのものとは、ほんとうは、あらゆるものの場合を包むところの需要にほかならない⁴⁰⁾。」ここで問題は「あらゆるものの場合を包むところの需要」とは比例（アナログア）に基づく包括概念を貨幣に付しているのである。したがって「貨幣は需要をいわば代弁する位置に立っている。さればこそノミスマ（νόμισμα）という呼称をそれは有している。それは本性的ではなくして人為的であり⁴¹⁾、…」と。つまり、貨幣はその国の一切の需要を含意して経済機構に付されているのだという。重ねてアリストテレスは「その際、…このものは協定に基づく。ノミスマという名称のある所以である⁴²⁾。」と言う。

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

貨幣はギリシャ語でノミスマであるが、意味深長である。ハイエクも捉えている。『法と立法と自由』において自由の法（ノモス）をギリシャ哲学から発見している。ノミスマとノモスは同根である。つまり、ノミスマの語意はまず、「慣習（として確立されていること）」、「制度」したがって「通貨」を意味している。それは人為的法であるが、テシス（立法の法）に対立する、市民が培っていく法、社会の法⁴³⁾を含意している。それを「協定（υπόθεσις）」と重ねて述べられている。このギリシャ語のヒュポテシスは「根底」、「根本原理」を含意している。したがって、貨幣は人間がつくりだしたものであるが、計画や意図されたものではないことが述べられている。貨幣に含意された意図せざる目的とは何か。それは貨幣が善の実現もたらす手段でなくてはならないということである。ケインズもアリストテレスを高く評価していることから見て、つまり流動性の罫で示されたように、貨幣を富に仕立て上げてしまった人間を批判しているくだりであるが、アリストテレスを彷彿とさせる⁴⁴⁾。アリストテレスは富について言う。「富がわれわれの求める善ではないことは明らかであろう。それは何かのために役立つもの、他のもののために存するものだからである⁴⁵⁾。」富は役立つべく社会に委ねられねばならないものである。まさに貨幣はノミスマである。つまり貨幣を包括概念・善の中に据えている。しかしふと現実に返ると、その難しさを感じる。現実には貨幣をノミスマと理解することからほど遠い。現代の金融政策は経済政策に加担して真の貨幣政策からほど遠い。否、第一本当に金融政策というものが存在するのであろうか、と言わざるを得ない。

市民を包括して政策を施す、国家や政治は明らかである。アリストテレスは述べている。『『人間的善』が政治の究極目的でなくてはならぬ。まことに、善は個人にとっても国家にとっても同じであるにしても、国家社会の善を実現し保全することのほうがまさしくより大きく、より究極的である⁴⁶⁾。』

再度確認しよう。所詮社会（諸個人）は非通約性に満ちている。しかし社会を構成するには通約性を求めねばならない。そうであるがゆえにこの非通

約性を通約性とする手段がなければならない。その一つがノミスマとしての貨幣である。その意味で法、言語、経済（貨幣）は同次元に置かれる通約性的手段である。哲学は近世において完成したと言われる、その中心にヒュームとカントはアリストテレスから多くを継承してきたと言って過言ではない。経済学においてはオーストリア学派のメンガー、ミーゼスやハイエク、そしてケインズも継承していた。非通約性と通約性との乖離は経済においては貨幣が、哲学（心理学）においては抽象が担っている。その嚆矢がアリストテレスに見られる。

メンガーの貨幣を述べておこう。メンガーは言う。「貨幣の発生にたいして習慣なるものが大きな意義を有する…」そしてメンガーはアリストテレスを引用する。それは「貨幣は合意によって発生したものであり、自然によるものではなく法によるものである…⁴⁷⁾。」というくだりである。貨幣が慣習により、そして法によるものであるとするならば、メンガーの価格は既述のアリストテレスの「協定（ヒュポテシス υπόθεσις）」として理解される。ここに交易における相等性（等価性）が貨幣によって価格として確立されていると思われる。確かに物々交換における相等性はあり得ない。財同士では通約性を持たないが故に。しかしそれを克服したのが貨幣である。貨幣によって相等性は確保される。しかしその相等性は客観的な数値を意味するものではない。メンガーは価格を次のように言う。

「価格、いいかえれば交換において表れる財の諸数量は、たとえそれがわれわれの感覚に鮮明に訴えるために科学的観察のもっとも慣行的にとりあげられる対象をなしているにせよ、決して交換という経済現象にとって本質的なものではない。本質的なものはむしろ、両交換者の満足のための交換によってより良好な先慮がもたさされるということのうちに横たわっているのである。…価格は単に偶然的な現象、人々の諸経済間の経済的均衡の徴候にすぎない⁴⁸⁾。」

メンガーは究極秩序や調和の世界を考えている。経済の交易に生じる価格は偶然的なものであってそれを目的とするわけではない。究極目的は人間の

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

「生命と福祉の確保」である。この究極目的は包括概念であり、アリストテレスの比例（アナログア）に淵源することが分かる。そのヴァリエントは調和や秩序である。

6. メンガーに見られるアリストテレスの思想

ポランニーも『経済の文明史⁴⁹⁾』で述べているように、古代を見る場合は現代で営まれる生活環境と大きく異なることを理解しなければならない。しかし裏を返せば、その環境に戻ってアリストテレスの思想だからこそ見えてくる経済学がある。現代経済で隠れてしまった思索構造が発見できるのである。そのことによって、哲学（倫理）と経済学が結びつく。なぜなら、素朴な経済システムは多くの人間的意識を残しているからである。その意味で、オーストリア学派経済学者やポランニーはそれなりの発見をしてきたのである。とりわけ、オーストリア学派経済学者のメンガーとハイエクはアリストテレスを批判しつつもその思想を確実に継承している。特にオーストリア学派経済学はプラトンやアリストテレス無しには生まれなかったであろうと思われるのである。

メンガーはいわゆる経済学の重要なタームの一つ、需要を（一般に使われている）需要とは言わず、「需求（Badarf）」⁵⁰⁾と言った。それはおそらくアリストテレスを十分読みこなした結果、獲得したものであろうと思われる。

メンガーは需求を次のように説明する。

「一人の人がその欲望満足のために必要とする財の数量をわれわれは彼の需求と呼ぼう。人々がその生命と福祉を維持するための配慮は、そのようにして、人々の需求の充足にたいする配慮となる。」⁵¹⁾

「個々の財ではなく各種の財の総体が経済人の目的に役立つこと、しかもこの財の総体が、あるいは孤立経済における場合のように直接に、あるいは今日の発達した状態の場合のように一部は直接に一部は間接に、個々の経済人によって支配され、それによって、ただこの総体性においてのみ需求の充足と呼ばれる結果

をもたらし、さらにこれに続いて人間の生命と福祉の確保という結果をもたらすこと、これはいたるところでみてとれる⁵²⁾。』

現代のミクロ経済学においても供給と組んで需要は欠かせないタームの一つである。その場合、需要は供給との関わりで意義が問われていることが多い。その需要はしばしば過去の経験知である。しかし、メンガーは需要の経験知という認識を嫌って需求と呼んだ。なぜなら、経済機構の主体は消費者個人であり、彼らの近未来の意向を含まずにはおかないからである。メンガーは述べている。アリストテレスが「欲望が理性的な考慮によって導かれるか、それとも非理性的なものであるかにしたがって真実財と想像財とを区別している⁵³⁾」と。それだけに個人の需要は時間と空間を広げて捉えざるを得なかった。そこには静態ではなく、動態が意識されている。メンガーはアリストテレスの『政治学』から引用している。「人間の生命および福祉にたいする手段を『財』と名付けている⁵⁴⁾」と。いわば、需求の世界は地平に置かれている。現代経済学は需要と供給は結びつけられ、これまでの因果関係が進む。しかしその因果が進めば進むほど消費者が本来持っていた潜在する需要の意識や意図が失われる。それを避けるため、あらためてメンガーは需要にあらずして需求として展開したのである。いわば、需要の意義を時間的かつ空間的に、つまり動態として捉え直したのが需求である。この需求は経済という組織の全体論を呼び起こす。さらに、需求は時代に囚われず、アリストテレスの古代も現代をも包括される概念である。残念ながら、ポランニーはこの視点に立っていない⁵⁵⁾。

したがって、需求に消費者の「先慮 (Vorsorge)」や「配慮 (Sorge)」⁵⁶⁾という時間的視野を入れ、財の費消まで思考の限りを尽くすこととなる。メンガーは消費者の主観を全体論の中で詳細な検討を加えたのである。換言すれば、経済の地平に人間の生命や福祉という目的論的使命が存在するのである。それは経済に自然な姿で「いたるところにみてとれる。」、つまり経済に「意図せざる結果」という経験知を確認し、それに消費者の主体を当為の概

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

念（生命の維持と福祉）まで高めようとした。

しかし、こうした考え方はむしろ古代哲学の時代の未発達な市場経済という環境に目を転じることから生じる。つまり消費者人間の基本姿勢に返ることから経済の核心を見いだせよう。現代のように供給が十分で需要が成立するとなると需要に十分な思索が施せないのである。逆説的ではあるが、古代の経済システムが未発達だけに、需要を需求として思索を施すことに十分であった。文化人類学者を自認するポランニーも同様であろう。メンガーやハイエクが古代哲学者にまで遡って施策を進める理由が理解できる。彼らはアリストテレスの経済思想から多くを学んでいると言わざるを得ない。

それには国家の役割がどうしても必要であった。メンガーはそのために国家に政治経済学の必要性を見出していると同時にその政治経済学という言葉を見出していたのはアリストテレスでは無かろうかと述べている。政治も経済も法を抜きにしては考えられない。それだけに国家の役割は非常に重い。その先駆けをアリストテレスは議論していたというのである⁵⁷⁾。もとより、ミーゼスは、ナチズム国家の罪過を経験し、政治経済学の使命を国家を超えたものとした。しかしハイエクは市民社会を守るための国家は必要であるとした。その議論はまたプラトンやアリストテレスに返ることのように見えるのである。つまり、アナロギアの世界そして演繹の世界である。

またアリストテレスがどのようにプラトンを批判しようが、アリストテレスもまたプラトンのアイデアの思想、言い換えればアナロギアの思想が根底に存在している。その思想基底を看過しかつ分化した現代経済学者にはアリストテレスの経済思想を理解することは困難に思われる。市場経済がまったく未開であるこの時代における国家⁵⁸⁾、経済（貨幣）そして人為的法が統治機構の頂点に立ち役割を果たしていたと思われる。そして、それらはアイデア（アナロギア）の思想が含意され、カリスマ性をもったものなのであった。もとより、このカリスマ性は現実の人間行為（人為的法＝ノモス）がつくりだしているということである。そしてプラトンが論じたアイデア（アナロギア）の観念をアリストテレスは現実に置き換え経験知として立ち上げようと

したと思われる。メンガーとハイエクはそれを見逃さなかった。

7. アリストテレスから見える現代マクロ経済学への警鐘

アリストテレスの課題は人間社会における、非通約性と通約性とをどのように解消するかであった。その解消の手段の一つに貨幣が上げられるわけである。もとより、その究極目的は幸福であり、「われわれのうちなる最善なるものの卓越性でなくてはならぬ⁵⁹⁾。」換言すれば、それは善（プラトンのアイデア）を実現するべく卓越性にあった。アリストテレスは続ける。「その固有の卓越性に即しての活動が、究極的な幸福たるのでなくてはならぬ⁶⁰⁾。」その卓越性の活動の一つに貨幣が存在した。その善に少しでも近づくために交易（貨幣＝ノミスマ）が存在した。貨幣は人為的法（ハイエクの自由の法）に基づくものであった。つまり、幸福が全体論に付されように、貨幣もまた全体論に付されるのでなければならない。

アリストテレスは既述のように、経済の核に貨幣（ノミスマ）をおいた。貨幣をして経済を司る機能を持つことが確認されたと言えよう。だが具体的事物の一つ、貨幣を現実態として読み直す。つまり「現実態（貨幣）は或る原理である、したがって、現実態（貨幣）は、原理とし、実体としては、可能態よりも先である」。貨幣は原理を含みかつ「可能態よりも先にある」ことになる。「可能態よりも先にある」貨幣は「意図せざる結果」という見えない世界を受け入れねばならない。その見えない世界の実現は法や言語に含意された社会的審判に基づく余地を堅持するものでなければならない。もっと言えば、貨幣は幸福と同格におかれて吟味されねばならない具体的事象の一つという理解である。

この言説を今の政策に照らしてみよう。現在の貨幣政策は金融政策と称してほぼ経験則に任されている現状を考えれば、その結果を憂えざるを得ない。金融政策は当初から極限られたものであったし、その限界は経験的に立証済みである。しかし、その立証済みの経験を持ちながら、いまだに景気浮

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

揚策に期待を掛けている。たとえ、目標や目的が成就されてもその副作用が必ず訪れる。副作用の無い薬は無い、と言われるかもしれない。しかし、今死なんとしている病に効く薬は必要である。それほどまでに効く金融政策が存在するか、そして立証可能であろうか。

換言すれば、貨幣は個々人に直接結びつく倫理を伴ったものであった。その倫理の実現は個人を離れた包括概念に基づくものであった。換言すれば、倫理は万人に及ぶものであるから、貨幣がノミスマなら、倫理が政策に置き換わったのである。一見して個人から乖離したように見えるが、それは倫理（人為的法＝自由の法）つまり第三者が価値から離れてみることのできる、比例（ロゴス、レイシヨ）である。アリストテレスはそれを均衡の実現に見ていたのである。貨幣愛を否定するケインズはアリストテレスの倫理学から後援をもらっていたのである⁶¹⁾。それほどまでに古代哲学者のアリストテレスの影響は大きいと言わざるを得ない。

こうして考えると、経済学は全体論にいつも付されるような指標、秩序や調和、具体的には幸福や福祉を掲げておかねばなるまい。しかしながら、現代経済学のマクロ的視点は経済成長やGDPの規模の大きさに重点を置き個々人から乖離したものとなっている。今の日本経済に置きかえて言えば、経済成長を達成したとか、完全雇用を実現したとか言われているが、消費者においてはその実感が全く湧かない。今の経済政策はこの乖離を否応なしに消費者に押しつけている。貨幣市場を通じた金融政策や財政支出を伴った官製の景気浮揚策はバイアスを伴ったものであることは明らかである。今の日本は景気が回復したと言っても、それは貿易マターであり、資産家マター日本人の需要つまり消費者に及んでの結果ではない。

再度マクロ経済学の出発点を掘り起こしてみよう。筆者は駆け出しの頃属する大学の学会誌（『政経論叢』）に「ケインズの主観主義」と題して5回の論説を展開してみた。経済学史学会でも発表してきた。だが、残念ながら好評を得るに至らなかった。しかし思わぬところで目に留まる結果となった。ケインズとハイエクを比較した箇所「共同主観」が文献として青土社の特集

号（『現代思想 ハイエク』⁶²⁾）で採り挙げられたのだ。それはケインズとハイエクを比較してではなくハイエク思想への一つの視点であった。いわば、その論説は一蹴に付されたに近い。しかし、2008年に至ってようやくドスタレール（Dostaler, G.）によって新たなケインズを見出したと受け止められた。しかし筆者にしてみれば、既に議論してきたことのように思えてならない。ドスタレールは述べている。

「ケインズには、政府が経済を微調整したり、市場の失敗のすべてに体系的に対応したりすることを可能にしてくれるような処方箋を提案しようという意図は決してなかった。彼は最初から、社会の病弊を診断することに関心をもっていた。しかし病弊に対する治療法は、彼にとっては別の次元であった、治療法は、教条的で決まりきった方法で処方されるべきではなく、状況・時期・場所に応じて変わってくるものである。このような意味において、『ケインズ政策』なるものは存在しない。…社会と同じく経済は、全知全能の権力によって一度かぎり定められたルールによって束縛されてはならないのである。」

「ケインズが残したものは、社会についての総体的な理解であり、社会が経済・政治・倫理・知識・芸術とどのように接合しているかについての総体的理解である。本書はそのような理解を再構成しようと試みてきたのであり、そこには依然として学ぶべき多くのことがある。20世紀の前半に彼が提示した診断は、今日なお妥当性をもっている。その診断は、かつてよりも今日によりよく当てはまる。なぜなら彼が見きわめた病のいくつかは、さらに悪化したからである⁶³⁾。」

「ケインズが残したものは、社会についての総体的な理解である。」とは、ハイエクと同様に筆者が議論してきた、全体論そして演繹論である。既述のようにケインズもまたアリストテレスを高く評価してきた経済学者の一人である⁶⁴⁾。だとするならば、ケインズの発案であるかのような現代のマクロ経済学は『一般理論』からの時局的に美味い部分をつまみ食いした、バイアスがかかったものということになる。最近リフレ派と称する経済学者がケインズ経済学は死滅していない、と言わんばかりに『一般理論』を後ろ盾にしている。しかしドスタレールの理解から見れば全くの誤謬と言えよう。アリ

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

ストテレスが生きていたら、現代のマクロ経済学を比例（アナログ）に基づききつい批判を投げかけたことは想像に難くない。

では、マクロ経済学をどのように位置付けたらよいのであろうか。善の実現という演繹論に従って、如何にして「…からの自由」を堅持するかである。この「…」はノモスの下で誤謬や悪の部分を目指しそれらから自由になるべく（それらに囚われることなく）、善の実現指数を為政者が定めるべきである。その善の指数とはメンガーが掲げた「生命の維持や福祉⁶⁵⁾」である。その場合、経済規模（GDP）、完全雇用の指数を破棄すべきというのではない。それらと平行して常に「生命の維持や福祉」の指数を合わせて加えることである⁶⁶⁾。

「生命の維持と福祉」の指数を政府行政が掲げるときの注意点を述べておこう。視点はどこまでも消費者個人である。その立場を行政は受け入れねばならない。個人消費者がしばしば陥るポピュリズムを回避しなければならない。それこそ行政が為政者と共に政策指数と実行に向けた強いリーダーシップをとらねばならない理由である。それはアリストテレスが述べていた、幸福（eudaimonia）の実現に対する姿勢に表れている。

個人は常に直接の利害を避けて常に社会的（総合的）な立場を忘れてはならない。それを訴えるのは為政者である。そのためには合理的精神、それには徳の高い精神が必要とされる。それを為政者は個人に強く訴えねばならない。これは選挙権と被選挙権の共有としなければならない。ハイエクが真の個人主義を強く訴えたのはこの共有部分が欠けているからである。

先進国日本の現状は大変厳しいものがある。労働生産性が先進国で最低であったり、労働分配率がこれまた最低であったりして、多くの日本の経済学者が危惧している。しかし経済学者も政治家もそれに対して処方箋を持たない。これは日本に真の個人主義が少しも根づいていないからである。

もとより、これには次のような反論をしばしば頂く。それは日本でも「暗黙の了解」というものがある。これが日本の技術に生かされ優秀な製品を作ってきた。しかし、この「暗黙の了解」は縦構造の社会や企業を主体とする

（個人を縛る）集団主義に基づくものが多い。この「暗黙の了解」と convention（もしくは agreement）との相違は、前者が容易に変化を遂げないのに対して、後者は常に変化の中におかれているという相違である。変化を認める社会はすべての事象がそもそも「意図せざる結果」であると認めることである。それが英国の慣習法である⁶⁷⁾。換言すれば、英国は動態を余儀なくされ、日本は静態を余儀なくされている。

日本企業はこの縦構造の意識が世界的企業競争で後れをとる原因となつて久しい。シャープの失敗や東芝の不正会計の根にキャップの人事争いがある。企業トップは企業や消費者を敬うのではなく、自己保身に長けた人々の集団である。それを咎める精神が企業内で少しも浮上しないのである。これは縦構造の社会であつて決して真の民主主義は生まれぬ風土としか言いようがない。

これを哲学的に言えば、日本には個人主義が芽生えず、相変わらず集団主義に縛られた勝手な私人でしかない。周知のように、個人を意味する Individual の語源は in + dividere（「分ける」）であり、「どうしても分けられない」を含意し、個人の存在は確固たる主体性が宿っている、と同時に社会という全体論（演繹論）に付される個人でもある。個人の主体性はこの全体論（演繹論）を堅持していくためのものである。この個人の存在意識はこれまで日本には華々しく芽生えることがなかったと言えよう。したがって、「暗黙の了解」は私人社会に当てはまり、個人社会に当てはまる言葉ではなかった。

とにかく、マクロ経済学の最大の課題は個人にとって経済の「意図せざる結果」を包括概念と意識し形骸化することなく消費者個人に直結し、善で包むことである。人文科学のみならず社会科学におけるアリストテレスからの影響は実に大きく、彼はまさに「万学の祖」である。

注

- 1) Dostaler, G., *Keynes and Battles*, Edward Elger Cheltenham, UK · Northampton, MA, USA, 2007, p. 177. (鍋島直樹・小峰敦監訳『ケインズの闘い』、藤原書店、2008年、400頁)
- 2) 1131a10～26 (高田三郎訳『アリストテレス ニコマコス倫理学 (上)』、岩波文庫、179頁) ここで不正 (不均衡) と正 (均衡) とが議論されている。財の交換は正でなければならず、そのためには4項目が措定される、すなわち当事者2人、提示される財2つ。そこで「もし当事者が均等なひとびとでないならば、彼らは均等なものを取得すべきではないのであって、…もし均等なひとびとが均等ならぬものを、ないしは均衡ならぬひとびとが均等なものを取得したり配分されたりすることがあれば、そこに闘争や悶着が生ずるのである。」これらから言えることはハッキリした階級社会が見て取れる。さらに政治制度で述べている。最善は君主制である。なぜなら、君主は被支配者たちのことを考えるからである。そして君主は被支配者のあらゆる善を優先して考えるからである。1160a35～1160b4 (『アリストテレス ニコマコス倫理学 (下)』、92-93頁)
- 3) Hume, D., *Treatise of Human Nature: Being an Attempt to introduce the experimental Method of Reasoning into Moral Subjects, Vol. III. OF Morals*, Analytical Index by L. A. SELBY-BIGGE, p. 490. (伊勢俊彦・石川徹・中釜浩一訳『人間本性論 第3巻 道徳について』44-45頁)
- 4) Hume, D., *Ibid.*, p. 490.
- 5) Hume, D., *Ibid.*, p. 494. (同書、48頁)
- 6) Hume, D., *Ibid.*, p. 497. (同書、52頁)
- 7) Hume, D., *Ibid.*, p. 489. (同書、43頁)
- 8) Hayek, F. A., *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, 1978, Reprinted by Routledge, 1990, p. 264.
- 9) 全体論は現代ではホーリズム (holism) とも呼ばれるが、全体主義や集団主義のそれではない。あくまでも方法的個人主義に基づく全体論である。
- 10) プラトン『国家』第6巻、508b-508d、田中美知太郎・藤沢令夫・森進一・山野耕治訳『プラトンⅡ』、中央公論社、1987年、236-237頁
- 11) Smith, A., *Essays on Philosophical Subjects*, pp. 37-47. (水田洋ほか訳『アダム・スミス哲学論文集』、名古屋大学出版局、14-28頁)
- 12) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 1033b20-28. (出隆訳『形而上学 (上)』、岩波文庫、1960年、255頁)
- 13) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 1036a5-6. (『形而上学 (上)』、265頁)
- 14) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 1070 b17, 1071a4, 1093 b18. (『形而上学 (上)』、142頁、143頁、145頁)
- 15) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 1070a32. (『形而上学 (下)』、140頁)
- 16) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 1048b6. (『形而上学 (下)』、33頁)

- 17) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, 1046a10-12. (『形而上学（下）』、20頁)
- 18) *ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK*, (『形而上学（下）』、260頁、第9巻第8章の訳者注(12)を見よ。)
- 19) 千葉恵『アリストテレスと形而上学の可能性 弁証術と自然哲学の相補的展開』、勁草書房、2002年、「2.11 比例論」371-373頁
- 20) 千葉恵、同書、「2.11 比例論」142~151頁、特に145頁
- 21) Steel, G. R. *Keynes and Hayek The money economy*, Routledge London and New York, 2001 p. 56.
- 22) パチョーリは『スムマ』の「序論で占星術、算術、彫刻、宇宙論、商業、用兵術、論理学、遠近法、さらには神学さえもが数学的な原理に基づいていることを断言している。」Crosby A. W., *The Measure of Reality Quantification and Western Society, 1250-1600* Cambridge University Press, 1997, pp. 214~215. (小沢千重子訳『数量化革命』272頁) 拙著『バランスの思想と複式簿記』、日本パチョーリ協会(The Pacioli Society Japan)、No. 32, 2017. 04を見よ。
- 23) 幾何学はエジプトのナイル川の氾濫に備える測量に由来するという。それがギリシャに伝えられたと。『哲学・思想事典』、岩波書店、1998年、「幾何学」の項目、304頁
- 24) 一つ概念に高度の抽象性を伴い、その抽象が確定されねば対象を数えることはできない。
- 25) 「パチョーリはダ・ヴィンチと同様に視覚を最も高貴な知覚とみなし、『目は知性がそれを通して外界を認知する表玄関である』と述べていたからだ。ダ・ヴィンチは『神聖な比例』の挿絵として、幾何学的図形を数葉書いている。」Crosby A. W., *Ibid*, p. 213. (同書、271頁)
- 26) カントは直観と概念(普遍的表象)の間に「図式(Schema)」が入って普遍的認識が進められるとする。この「図式」というタームもギリシャ古代哲学からの継承であって幾何学における演繹と無関係ではない。Kant, I., *Kritik der Reinen Vernunft*, S. B179f. (篠田英雄訳『純粋理性批判(上)』、岩波文庫、214-216頁)
- 27) 藤本吉蔵『スピノザ思想の原画分析』、政光プリプラン、2008年、75頁、78頁、129-130頁を参照
- 28) 伊藤邦武『アリストテレスの経済思想再考』、「経済研究 Vol. 67」2016年、特にその中で注の4)を見よ。口頭で松浦和也氏が指摘した「ラディカルではない」と述べている。なぜ「ラディカルではない」かについては十分な理解とはなっていないようである。筆者に言わせれば、数学は幾何学から始まったのである。それは科学的に目で確かめられる可視化を含意していたのである。その意味で数学や代数が離散した数という意味で理解されると同時に、経験を重んじたアリストテレスの幾何学への重さを感じ取るのである。
- 29) Smith, A., *Ibid.*, p. 40.
- 30) Smith, A., *Ibid*. pp. 45-46. (同書、26頁)
- 31) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science Studies on the Abuse of Reason*,

- Liberty Press, 1952, p. 81. (『科学による反革命—理性の乱用—』57-58頁)、同様な記述が『個人主義と経済秩序』にも見られる。IEO, p. 62. (嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』85-86頁) またこの言説はマッハにも見られる。Mach, E. *Die Analyse der Empfindungen*, Verlag von Gustav Fischer, 1922, S. 10f. (須藤吾之助／廣松渉訳『感覚の分析』法政大学出版局、1976年、12-15頁)
- 32) ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK, 983a12-18. (出隆訳『形而上学(上)』、岩波文庫、1960年、30頁)
- 33) Hayek, F. A., *The Sensory Order* (穂山貞登訳『感覚秩序』) を見よ。
- 34) ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK, 983a12-21. (『形而上学(上)』30頁)
- 35) ARISTOTELOYS TA META TA PHYSIEK, 1003b1, 1048b1. (『形而上学(上)』112-113頁、『形而上学(下)』33頁)
- 36) 肯定判断：AはBである。否定判断：AはBでない。無限判断：Aは非(不)Bである。Aは魂、Bは死とする。肯定判断は「魂は死である」である。否定判断は「魂は死さない」であるが、それに留まる。無限判断「魂は不死である」は、魂は死を否定するが、同時に魂の存在は肯定される。ここに新たな領域が開かれる、つまり無限判断である。Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft*, S. 95f. (篠田英雄訳『純粹理性批判(上)』岩波文庫、144頁)、石川文康『カント第三の思考』、名古屋大学出版会、1996年、32頁を参照。
- 37) 石川、同書、37頁
- 38) Kant, I. *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, Philosophische Bibliothk, S. 124. (篠田英雄訳『プロレゴメナ』岩波文庫、224-225頁)
- 39) ハイエクは述べている。「経済学は応用論理学の一分野であるという性格から、直接引き出されるものである。それにもかかわらずこの主張は最初人を驚かす響きを持っている。それは、我々が我々自身の知性の持つ知識から『先験的』、『演繹的』、もしくは『分析的』な方式ですべての理解しうる行動の網羅的な分類を(少なくとも原理的には)引き出しうるということなのである。」Hayek, F. A., *IEO*, pp. 67-68. (嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』、春秋社、2008年、95-96頁)
- 40) ΗΘΙΚΩΝ ΝΙΚΟΜΑΧΕΙΩΝ ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ, 『アリストテレス ニコマコス倫理学(上)』、1132a27、(岩波文庫、188頁)
- 41) ΗΘΙΚΩΝ ΝΙΚΟΜΑΧΕΙΩΝ ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ 『アリストテレス ニコマコス倫理学(上)』、1132a30、(188頁)
- 42) ΗΘΙΚΩΝ ΝΙΚΟΜΑΧΕΙΩΝ ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ 『アリストテレス ニコマコス倫理学(上)』、1133a21、(189頁)
- 43) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, 1973-1979, Reprint 1993 by Routledge, pp. 94-144.
- 44) Dostaler, G., *Keynes and Battles*, Edward Elger Cheltenham, UK・Northampton, MA, USA, 2007, p. 163. (同書、369頁)
- 45) ΗΘΙΚΩΝ ΝΙΚΟΜΑΧΕΙΩΝ ΑΡΙΣΤΟΤΕΛΟΥΣ 『アリストテレス ニコマコス倫

- 理学（上）』、1096a6-8、（『世界の犬思想2 アリストテレス』、河出書房、1966年、21頁） 訳者高田三郎は岩波文庫の訳と若干変えている。
- 46) *HΘIKΩN NIKOMAXEION APICTOTEAIOYΣ* 『アリストテレス ニコマコス倫理学（上）』、1094b4-6、（『世界の犬思想2 アリストテレス』、河出書房、18頁）
- 47) Menger, C., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 1871, J. C. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen 1968, S. 258. (GV) (安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』、日本評論社、224頁)
- 48) GV, S. 172. (『国民経済学原理』、149頁)
- 49) Polanyi, K., *Aristotle Discovers the Economy*, 1965, pp. 65-90.
- 50) GV, S. 32. (『国民経済学原理』、29頁)
- 51) GV, S. 32. (『国民経済学原理』、29頁)
- 52) GV, S. 30f. (『国民経済学原理』、28頁)
- 53) GV, S. 4. (『国民経済学原理』、6頁の注)
- 54) GV, S. 2. (『国民経済学原理』、4頁)
- 55) Polanyi, K., *The livelihood of Man*, p. 34. (玉野井芳郎/栗本慎一訳『人間の経済』、岩波書店、86頁) 拙著『メンガー経済学の世界』、政経論叢161号、2012年を60-64頁を見よ。
- 56) GV, S. 32f. (『国民経済学原理』、29-31頁)
- 57) Menger, C., *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politischen Oekonomie insbesondere*, Verlag von Duncker & Humboldt. 1883, S. 8. (吉田昇三改訳『経済学の方法』、日本経済評論社、1986年、24頁)
- 58) まず国家について、アリストテレスは述べている。「国は、現にわれわれが見る通り、いずれも或る種の共同体である、そして共同体はいずれも或る種の善きものを目当てに構成されたものである（というのは、凡ての人は、善きものであるとおもわれるもののために凡てのことを為すからである）。だから、共同体はいずれも或る種の善きものを目ざしているが、わけてもそれらのうち至高で、残りのものごとく包括している共同体は、〔その他の共同体にくらべて〕最も熱心に善きものを、しかも凡ての善きもののうち至高のものを目ざしていることは明らかである。そしてその至高のものというのが世にいう国、あるいは国的共同体なのである。」*Aristotelis Politica*, 1252a (山本光雄訳『アリストテレス政治学』岩波書店、3頁)
- 59) *HΘIKΩN NIKOMAXEION APICTOTEAIOYΣ* 『アリストテレス ニコマコス倫理学（下）』、1177a14
- 60) *HΘIKΩN NIKOMAXEION APICTOTEAIOYΣ* 『アリストテレス ニコマコス倫理学（下）』、1177a18
- 61) Dostaler, G., *Ibid.*, pp. 163-166. (同書、368-376頁)
- 62) 『現代思想 特集=ハイエク』、青土社、1991年12月
- 63) Dostaler, G., *Ibid.*, p. 259. (同書、567頁)
- 64) *The Collected Writings of J. M. Keynes, VIII (A Treatise on Probability, 1921)*, p. 305. (佐藤隆三訳『確率論』、東洋経済、2010年、318頁) ここで帰納法を巡って

アリストテレスから学ぶ貨幣とマクロ経済学（山崎）

全く異なった二つの方法が、アリストテレスが述べていたとして引用されている。後者は演繹論である。

- 65) *GV*, S. 30. S. 32. (『国民経済学原理』、27頁、29頁)
- 66) 幸福度指数は『栃木県民の幸福度と地方創生にかんする調査研究』、連合栃木総合生活研究所、2017年、を参照せよ。
- 67) したがって、英国は縛られる憲法を持たないのである。